

大阪+知的障害+地域+おもろい=創造

## 知の知の知の知

社会福祉法人大阪手をつなぐ育成会 社会政策研究所情報誌通算 2713号 2015.11.12 発行

視覚障害者も「見える」メガネ、治験へ…網膜に映像投影 読売新聞 2015年11月11日



レーザー光を活用したメガネ型の視覚支援機器を体験する女性。装着すると手前の画面が網膜に映しだされる（10日、東京大学）

半導体レーザーのベンチャー企業「QDレーザ」（本社・川崎市）は10日、レーザー光を利用したメガネ型の視覚支援機器を使って、視覚障害者の視力を改善させる臨床試験（治験）を、独のエッセン大学病院で行うと発表した。視覚支援機器は、同社と東京大学の荒川泰彦教授らが共同開発したもので、小型カメラで撮影した映像などをレーザー光で患者の網膜に直接投影する。網膜や角膜が傷ついた重い視覚障害者にも、鮮明な画像が提供できると期待されている。

治験は来年、網膜の中央部が傷つき、視野がゆがんだり暗くなったりする加齢黄斑変性の患者約100人で、効果と安全性を検証。来年末までに、欧州の医療機器認証の取得を目指す。

同大病院のある独ノルトライン・ヴェストファーレン州は、医療産業の育成に力を入れており、日本の技術も積極的に導入している。筑波大学の山海嘉之教授が開発した医療

ロボット「HAL」の実用化を支援。HALは同州での治験などをもとに、2013年に欧州の医療機器認証を得て、脊髄損傷患者のリハビリ治療に使われている。

QDレーザは、国内向けには医療機器ではなく、福祉用として、同様の製品を来年3月に市販する計画。

【まぜこぜエクスプレス】Vol. 16 傷ついた子供たちのために ドイツ国際平和村  
日本人ボランティア同村会 産経新聞 2015年 11月11日

ドイツ国際平和村の子供たち=ドイツ・ノルトライン=ヴェストファーレン州オーバーハウゼン（提供写真）

ドイツの小さな街、オーバーハウゼンにある「ドイツ国際平和村」（[www.friedensdorf.de](http://www.friedensdorf.de)）の日本人ボランティアたちによる同村会が10月11日、東京・青山で開催された。名付けて「ドイツ平和村大同村会～ウルルン子ダヨ！ 全員集合！～」。戦後・被曝70年という節目に、世界中の紛争で傷ついた子供たちに寄り添い、何ができるのか、何をすべきなのかを考える貴重な機会となった。



番組がきっかけで急増



ドイツ国際平和村とのお付き合いは1999年から。当時人気番組だった「世界ウルルン滞在記」(TBS系)で、ボランティアとして平和村を訪れ



紹介したのが始まりだった。

「村」という名称だが、そこはとても衛生的とはいえない古い施設だった。アンゴラやアフガニスタン、アルメニア、ウズベキスタンといった紛争地や紛争からの復興途上の国の傷ついた子供たち(0~15歳)を救

う活動を行っている。

活動はまず、平和村のスタッフが紛争地に赴き、傷ついた子供たちとその家族と面談をする。どの子供も空爆の爆弾や地雷、銃、バーナー、ナイフなどの武器でひどいけがを負っている。私が同行したアンゴラでは、もはや機能していない病院裏の原っぱに200人以上の子供と家族が集まっていた。血と膿みの臭い、まとわりつく蠅、漂う疲労、絶望の瞳…。吐き気を我慢するのに必死だった。その中からドイツに渡り生きていけそうな子を選ぶ。チャーター機に乗せられるのは50人弱。ほとんどの子供はそのまま天国に召されていく。ニュースなどでは伝わってこない戦争の惨劇だった。

親と離れてドイツの病院へ。何度も手術(全て無償)を重ね、退院したら平和村でリハビリ。日常生活を送ることができるようになれば、母国に帰ることができる。短い子で約半年だが、5年かかる子もいる。

全て募金で運営。職員のスタッフ以外にボランティアが大勢いる。ウルルン滞在記放送後、日本人ボランティアが増え、ボランティアから職員として働くことになった日本人スタッフも常駐している。今や平和村にとって日本はなくてはならない存在だ。今は亡き代表、ゲーゲンフルトナー氏は「日独国際平和村だね。日本の皆さんに感謝しているよ」と目を潤ませていた。

今回、その感謝の気持ちを伝えたいと、現代表のトーマス氏の初来日を実現した。延べ1000人を超える、全国に散らばる日本人ボランティアに呼びかけ、約140人が集合。ドイツからはトーマス氏率いる5人が参加した。平和村史上、スタッフ同士で戦地以外の海外を訪れるのは初めて。私自身も日本での再会は初めてのことだ。夢見ていた日を実現した。

### 「無くすこと」が一番の目標

当日は、ウルルン滞在記以降、平和村を追い続ける河原剛ディレクターがこの日のためだけに編集した16年間の平和村と私の歩みの映像をお披露目したほか、現在の平和村で暮らすパレスチナ自治区のガザの子供たちのメッセージ、医療ボランティアからの報告、私の絵本読み聞かせなど盛りだくさんの内容。「初めまして」の人同士がほとんどだったが、平和村を通じてつながっている仲間同士で、過去、現在、そして未来に向けて話に花が咲き、どれだけ時間があっても足りなかった。

「平和村でパートナーと出会いました。今はNPOで働いています」「小学生の時にウルルンを見て平和村を目指しました。外務省で働いています」「活動するために保育士の資格を取りました。来年平和村に行きます！」などなどの熱い声。平和村は傷ついた子供たちを救いながら、救う側の人たちの心を育み、平和の種もまいている。救う側と救われる側が癒やし合い、慈しみ合う相互感動を体験する、ホスピタリティーあふれる現場だからこそ、リピーターが多い。

しかし、その活動は決して順風満帆というわけではない。2007年から20回以上もボランティアに通っている医師の矢倉幸久さんは「医療施設ではないのに、医療施設並み

の管理が求められており、対応が追いついていないなど課題がある」と問題提起を行った上で、「平和村には質の高い日本人のボランティア、リピーターが必要」と訴えた。12年から平和村で作業療法士としてリハビリを担当する勝田茜さんは「ボランティア期間が終わり、日本での生活が始まると、日々の生活と並行して平和村の活動に参加し続けることは容易ではない」と指摘した上で、「だからこそ今も平和村で活動する者として、これほど多くの人がいとおしく思って支えてくれている活動を大切にしたい」と語った。

「無くなること」が平和村の一番の目標だが、残念ながら紛争や武器はより複雑になり、地球上の現実はますます厳しくなっている。まだまだ当分の間は、ボランティアたちのつながりを広げていくことが必要だ。(一般社団法人「Get in touch」編集部/SANKEI EXPRESS)

## 東京・世田谷区が団地の空き部屋を安く提供 児童養護施設退所の若者の負担軽減

産経新聞 2015年 11月 11日

### 経済的不安を緩和 大学などの中退防ぐ

世田谷区は平成28年度にも、児童養護施設を退所した若者に、区営住宅の空き部屋を月額1万円程度の家賃で貸す取り組みを始める。経済的負担を減らすことで、退所者が大学などへ進学した場合の中退を防ぐ狙いだ。ただ、退所者の中には、施設職員以外に相談相手がおらず、退所後の孤独から中退することも少なくないといい、併せて精神的支援も求められている。(植木裕香子)

#### ◆バイトでやりくり

保育士をめざす女子短大生(20)は、経済的な理由で8歳から姉、兄とともに入所していた同区内の児童養護施設を高校卒業後に退所。現在、1人暮らしをして短大に通う。

授業料は奨学金で支払っているが、毎月の家賃や生活費などは、午後5時から午後11時まで、時給975円でスポーツクラブのアルバイトなどで得る約8万円の中からやりくりする。

連絡が取れない兄、結婚し嫁いだ姉、定年退職した父。家族に経済的に頼ろうとは思わない。とはいえ、「アルバイトで稼いだ同じ8万円でも、他の人はライブとか、おいしい食事を楽しむことができる。私は(生活費など)使い道が限られているし、遊びの幅がない。周りと比べてときに落ち込むときがある」と打ち明ける。

授業料が払えなかったり、出席日数が足りず、大学などを中退する退所者も多いという。

厚生労働省の調査で、児童養護施設の退所者の大学などの進学率は、全国平均の約7割を大幅に下回る約2割にとどまる。一方で、NPO法人「ブリッジフォースマイル」(千代田区)の調べによると、施設退所者の大学などの中退率は約3割にのぼる。

#### ◆月額1万円程度

こうした現状を踏まえ、同区は区内の児童養護施設の出身者を対象に、5カ所程度の区営住宅の空き部屋を月額1万円程度で入居できる取り組みを検討している。退所者の家賃負担を軽減する経済支援で、中退者を減らす狙いだ。

現在2～18歳までの子供約50人が入所する同区の児童養護施設「福音寮」の飯田政人園長(57)は「保護者が授業料を負担して学校へ行く子供と比べて、施設の退所者が越えなければならないハードルは多い。経済的不安が緩和されることは、退所者にとっては大きな安心材料になる」と述べ、区の取り組みを評価する。

#### ◆精神的サポートも重要

家賃4万円のアパートに住む女子短大生も「4万と1万じゃ、全然違う。すごく助かる」と、区の取り組みを期待する一方、精神的なサポートも重要と話す。

「学校がつまらなくて欠席が続き、短大を辞めようと思う度に、姉が『自分で決めたことなんだから最後までやりなさい』と励ましてくれた。心が通じ合える人が相談に乗ってくれたり、支えてくれなかったら、途中で短大を辞めていたかもしれない」と振り返る。

飯田園長も「1万円でアパートを貸すというだけでなく、最低でも大学などを卒業するまでの間、施設の職員らが、退所者の部屋に行って話を聞くなどして支え、自立に向けて支援する態勢を整えることが重要」と指摘。区でも退所者が相談できる環境の整備についても検討している。

### “生きる力 取り戻す” 食の最前線

NHKニュース 2015年11月8日



近田「今、食べ物をかんだり、飲み込んだりする力が衰え、口から物を食べ物を取ることが難しくなっている人が全国に100万人以上いると言われてます。」

上條「今日（8日）は、そうした人たちに向けた“食事”がテーマです。スタジオには、取材にあたった名古屋放送局、河西ディレクターです。」

河西ディレクター「まずは、こちらの料理を見て下さい。」

近田「おいしそうなしょうが焼きですね。定食などでよく見かけますけれどもね。」



河西ディレクター「上條さん、スプーンでちょっと触ってみてください。」

上條「あ！見てください、これ。力を全然込めてないんですけど、すぐに崩れますね。」

河西ディレクター「こちら“えん下食”と呼ばれるものです。“えん下”とは口から食べ物を飲み下すことを意味しています。“えん下

食”は、飲み込みやすくするためにやわらかく作られているのが特徴なんです。」

上條「どうやって作るんですか？」

河西ディレクター「実はこちらが元になっているん



です。ミキサーでペースト状

にした“ミキサー食”とも呼ばれるものです。これは、豚のしょうが焼きのミキサー食になります。介護の現場などで広く普及しているんですが、味気ないとか、見た目では楽しめないなどの声もあがっています。こうしたものが、どのようにして“えん下食”になるのか、こちらをご覧ください。」



欠かせないのが、この粉末。“ゼリー化剤”と呼ばれるものです。これをミキサー食に混ぜます。加熱していくと…。ゼリー状に固まるんです。

固まったら、形を整えます。バーナーで焦げ目をつけると。見て下さい！見た目もしょうが焼きそのものです。」



上條「だいぶ手が込んでいましたし、想像がつかせませんでした。」

河西ディレクター「上條さん、せつ々なので、どうぞ。」



上條「じゃあ、これ早速いただきますね。まず、香りはしょうが焼きそのもので、味もおいしい！はじめて“えん下食”を食べましたけど、違和感がなくて、おいしくて、びっくりしますね。」

近田「すぐ飲み込めます？」

上條「口の中にほどんど残っていないです。ほわあっととけました。」

河西ディレクター「こうした見た目も味もよく、かつ安全に飲み込めるという“えん下食”。今、お年寄りの健康や生きがいにも大きな効果を生み出しています。」

### 生きる力 取り戻す “食の最前線”

岐阜県に住む、水谷文子さんです。先月（10月）、101歳になりました。

水谷文子さん「これもできなかった。今までは全然。」みずからの足で歩こうと、最近この運動を始めました。実は、水谷さんは2年前に肺炎を患い、ほとんど寝たきりの状態でした。当時の様子を記した記録です。

“食欲はあるものの、飲み込めず、はき出されました。”

栄養は主に点滴からとることになり、体重は10キロ減りました。

長女 恵美子さん「もうもたない、元気になるどころではない、そういう心配があった。」

普通の料理は飲み込めず、見た目がなじめないと、ミキサー食も受け付けなかった水谷さん。栄養士の紹介でえん下食を知り、劇的に変わりました。

この日の昼食。家族が作っていたのは、おもちのえん下食です。そこに、のせるのはレトルトの肉じゃが。これもやわらかく、飲み込みやすくしたえん下食。えん下食になってからの食欲は旺盛です。

水谷文子さん「おいしい。いつもいただく物は全部いただいている。こうやって作ってもらわ



ないと、今頃生きていない。」

ミキサー食に比べて見た目がよく、それが食欲を刺激します。えん下食を食べるようになって2年。体重は元に戻りました。

長女 恵美子さん「正直びっくり。もう最期のことまで考えたぐらい。今では、そんなことは考えられないくらい元気になりました。」

最近、ベッドから起き上がり、お気に入りの歌を口ずさむようになりました。

水谷文子さん「歌を聴かせてしまって恥ずかしい。」

食べることで、なぜ元気を取り戻すことができるのか。長年、高齢者の食と健康を研究している葛谷雅文さんです。食べることは体全体の機能の回復につながると考えています。

葛谷さんが考えるメカニズムです。

そこには小腸が大きく関わっているとみています。

人間の小腸には、“じゅう毛”と呼ばれる部分があります。

口から食べたものは、だ液や胃酸の働きによって細かな栄養素に分解され、ここで体に吸収されます。

一方、口から食べ物が運び込まれないと、じゅう毛の働きが低下し萎縮。栄養の吸収が減っていきます。しかし、えん下食によって再び食べ物が運び込まれるようになれば、小腸は栄養素をより多く吸収しようと、じゅう毛が伸びるなど、動きが活発化。結果、



多くの栄養を体に取り込むことができるのです。さらに今、葛谷さんが最近行った調査からは、口から物を食べ続けていれば寿命も伸びる傾向にあることも分かってきています。およそ1,900人のお年寄りを調査した結果です。3年後の生存率は、点滴の人は33%。管を通してからだに栄養を送り込む胃ろう・腸ろうの人は4%

4%。それに対して、えん下食などの介護食を食べた人は54%と高い数字であることがわかりました。  
名古屋大学 葛谷雅文教授「しっかり食べられるようにすることは、十分な栄養が体に入るといこと。そうすると、衰えた筋肉もつく。病気に対する抵抗力も出てくる。なるべく早期に何らかの介入をして、口から食べられる機能をなんとか維持する方向に向かうのが大事。」



えん下食を使って、食べる力を取り戻そうというリハビリも広がりつつあります。リハビリに取り組んできた小野木聖さん、74歳です。2年前、以前から患っていた神経の難病が悪化。人工呼吸器をつけるために気管を切開しました。口から物を食べることができなくなり、“腸ろう”で栄養を補給することになりました。当時の小野木さんです。ほとんど寝たきりで口から物を食べることは難しい状態でしたが、栄養士や家族のサポートで、リハビリに取り組み始めました。最初は、野菜や果物をすりつぶし、ゼリー状にしたもの。ごくわずかに飲み込むのがやっとでしたが、次第に食べられる量が増えていきました。その後、医師や栄養士と相談を重ねながら、少しずつやわらかさを変えた、えん下食を食べていったのです。

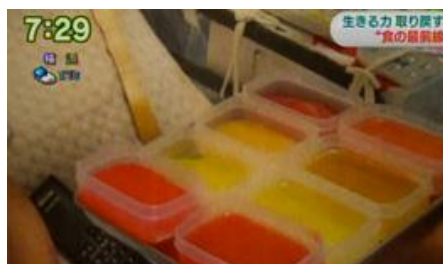
リハビリを始めて2年。かむ力や飲み込む力が回復してきています。

妻 とよ子さん「できましたよ。」

この日の晩ご飯。お膳に並んだのは、えん下食だけで



さらに今、葛谷さんが最近行った調査からは、口から物を食べ続けていれば寿命も伸びる傾向にあることも分かってきています。およそ1,900人のお年寄りを調査した結果です。3年後の生存率は、点滴の人は33%。管を通してからだに栄養を送り込む胃ろう・腸ろうの人は4%



口から物を食べることができなくなり、“腸ろう”で栄養を補給することになりました。当時の小野木さんです。ほとんど寝たきりで口から物を食べることは難しい状態でしたが、栄養士や家族のサポートで、リハビリに取り組み始めました。最初は、野菜や果物をすりつぶし、ゼリー状にしたもの。ごくわずかに飲み込むのがやっとでしたが、次第に食べられる量が増えていきました。その後、医師や栄養士と相談を重ねながら、少しずつやわらかさを変えた、えん下食を食べ



みんなと同じ物を食べられるようになった  
家族みんな喜んでいる

はありません。小野木さん大好物の、妻・とよ子さんお手製の卵焼き。さらに、地元で取れたあゆの甘露煮です。栄養士から一部の普通食を食べる許可がおりるようになりました。妻 とよ子さん「こんなに食べられるようになるとは、本当に思わなかった。本人が食べたいって意思が強くて、みんなと同じ物を食べられるようになった。家族みんな喜んでい



る。」  
食事をとることで、体重や筋力も増加。少しずつ歩けるようになり、以前の暮らしを取り戻しつつあります。

妻 とよ子さん「そんなにこっちにやったらかかる。」

えん下食による、食べる力のリハビリには、専門家の適切な指導が必要です。

「はい、飲みましょう、ゴクッと。」

愛知県にあるこの病院。“食のリハビリ”では、国内有数の施設です。全国で初めて導入したのが、体の内部を撮影するために開発されたこの特別な装置。撮影された画像からは、食べ物をうまく飲み込んでいるかどうかや食道や声帯の動きを見ることができます。病院は、画像を見ながら診察。患者一

人一人に合わせたえん下食を用意してリハビリを進めています。

藤田保健衛生大学 稲本陽子准教授「簡単すぎてもいけない、難しすぎてもいけない。今ちょうど、その患者の機能に合った食べ物のレベルのものを推奨していく。推奨された食べ物を食べ続けることで、機能改善も見込めると思う。」



近田「お二方も、本当に劇的に元気になっていたのが印象的でしたね。」

上條「特に、お医者様から食べるのを難しいと言われていた小野木さんの回復ぶりはすばらしいですよ。でも、こういったえん下食って、家庭で作るにはどうしたらいいんでしょうか？」

河西ディレクター「例えば、こちらをご覧ください。

大手料理レシピサイトがインターネット上で作り方を紹介しています。」



上條「こんなにたくさんあるんですね。」

河西ディレクター「一方で、家庭での調理が難しいという人に向けては、レトルトのえん下食も販売されています。」

近田「それが、私たちの前にある、こちらですね。」

河西ディレクター「こちらは、101歳

の水谷さんが食べていたレトルトの肉じゃがです。そのほかにも、さまざまな種類がありまして、さばの煮つけであったり、こうしたすき焼きなどがあります。」



上條「見た目は全然わからないですけども。」

近田「これもえん下食なんです。ちょっとこれ、触れてみても大丈夫ですか？」

上條「肉じゃがのお肉ですが…。わかりますか？こんなにやわらかい。これはやわらかいですね、びっくり！」

近田「これはどこで手に入るんですか？」

河西ディレクター「こうしたものは、今、通信販売を通じて購入できますが、商品によってやわらかさが異なるため、注意が必要です。えん下障害に詳しい医師や、栄養士などがある病院に相談してください。」

## 論説：いじめ再調査 早期に芽を摘む努力重要 佐賀新聞 2015年11月11日

文部科学省が公表した2014年度の小中高校のいじめ件数は、岩手県矢巾町の中2男子の自殺を受けた異例の再調査で当初集計から約3万件も増えた。文科省は「積極的な把握の進展」と分析しているが、再調査がなければ埋もれていた可能性もある数字だ。いじめを広く捉え、細やかに目配りしていく姿勢を現場に浸透させたい。

矢巾町のいじめ自殺では、学校がいじめと捉えず、組織的な対応をしなかったところに問題があった。さらに13年度の調査では、千人当たりの件数が都道府県間で最大83・2倍もの格差があった。こうした問題を踏まえ、文科省は8月に各教委へ再調査を通知した。小学校は前年度よりも約4千件多い12万2721件と過去最多を記録、小中高を合わせた全体では18万8057件と過去2番目に多い水準となった。特に小学校では低学年の増加が顕著で、文科省は軽微ないじめでも早期に把握しようとする姿勢が数字に表れたとみている。佐賀県も公立小学校が前年度の約3倍となる125件、小中高・特別支援学校全体が45件多い283件だった。

数字上は増加した格好だが、細やかな対応によるものならば評価できる。それだけ子どもたちにケアの手が届いたと考えれば、増加を前向きに捉えたい。逆に怖いのは、「いじめは少ない方がいい」「件数が多いれば指導力に課題があると評価される」という考えが残っていないかということだ。こうした考えは、いじめの芽を見過ごすことにつながりかねない。再調査で、千人当たりの件数の都道府県間格差は30・5倍となり、13年度よりも差は縮小した。最多の京都府85・4件に対し、佐賀県は2・8件と全国最少だった。県内の未然防止の取り組みが奏功しているかもしれないし、日常的に起こる人間関係上のトラブルや軽微なからかいと、いじめをどう線引きするかという判断の難しさが影響しているのかもしれない。重要なことは、小さなトラブルも見過ごさずにいじめの芽を早期に摘むという姿勢だろう。

矢巾町の事件では、自殺した男子生徒は同級生によるいじめを再三訴えていたが、学校側はいじめとして対処せず、単なるトラブルと捉えていた。いじめの手口は陰湿化、巧妙化が指摘されており、見えにくくなっている。近年はパソコンや携帯電話を使った中傷が増えており、文科省も「ネット上のいじめは把握しきれていない」と認めている。「見過ごせば命に関わる」という問題意識を共有し、幅広くアンテナを張りたい。

千件当たりの件数が最多の京都府は、全児童生徒を対象にしたアンケートの質問を13年度から「嫌な思いをしたことがあるか」に変更した。すくい上げる対象を広げるとともに、「いじめ」の言葉を使わないことでアンケートへの抵抗感を小さくする狙いがある。こうした工夫の積み重ねこそが、着実な実態把握に近づける。文科省は、いじめを「心理的、物理的な攻撃を受けたことにより精神的な苦痛を感じているもの」と定義。その判断は「いじめられた児童生徒の立場に立って行う」とし、子どもの気持ちを重視することを強調している。現場はこの基本スタンスを再認識したい。(梶原幸司)



月刊情報誌「太陽の子」、隔月本人新聞「青空新聞」、社内誌「つなぐちゃんベクトル」、ネット情報「たまにブログ」も  
大阪市天王寺区生玉前町5-33 社会福祉法人大阪手をつなぐ育成会 社会政策研究所発行